令和七年七月吉日初版作成

正覚と顛倒夢想

高嶋　善三郎

目　次

●神界に昇るための智慧と方法・・・・・・・・・・・・・３
●顛倒夢想の意味・・・・・・・・・・・・・・・・・４
●顛倒（てんどう）した思い方の因（もと）の背景・・・５
●正覚につながる空の道・・・・・・・・・・・・・・６
●空の境地になった時の観方・・・・・・・・・・・・６
●消えてゆく姿の中に本心の光を見出す・・・・・・・８
●守護霊守護神と大神様の働き・・・・・・・・・・・９

お　願　い

既に作成した資料（バックナンバー）は、ウエブサイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。
より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。
次の連絡先にお願い致します。

（スマホ）０９０-３３４６-６６１９
（メールアドレス）zensan@peach.ocn.ne.jp

神界に昇るための智慧と方法

『般若心経』の中にある「顛倒夢想（てんどうむそう）」という言葉がありますが、この意味について、分かりやすく教えてください。

まず、『般若心経』はどういう内容のものか、見てみましょう。

五井先生が解釈されたものは、小冊子『般若心経の新しい解釈』や『空即是色　般若心経の世界』などがあり、それをもとに、整理します。

釈尊の弟子たちを代表して、舎利子が観自在菩薩に「正覚を求めて私たちは修行していますが、どのようにしたら正覚に達せられるのでしょうか」と質問し、神界に昇るための知恵と方法を教わる内容が記述されています。

舎利子の質問に対して、観自在菩薩は最高の統一である般若波羅蜜多（正覚）の行に入り、次のように答えられた。

この現象界、肉体界は、物質と私たちの心が作り出すものである。その現象界、肉体界に、私たちは神の分霊として、肉体を纏いて実在界（神界）から、降りてきており、光そのままの実在（愛と調和）の姿をそのまま現わそうとしている。

この現象界、肉体界（五感）、幽界（六感）のすべてのもの（色）を空と断じ切ると、その奥に実在の世界（真の空）が現れてくるのである。

実在の世界になった瞬間に現象世界（仮相的色（もの）の世界）が、すべて光明燦然たる実在、宇宙に満ちる存在の種種なる使命的光（色）として存在してくるのである。

また、感覚器官等を通して入ってきて形成される意識（受想行識）も同様に空と断じ切ると、その奥に実在の世界（真の空）が現れてくるのである。

故に実在の世界（空の中）には色もなく、受も想も行も識もなく、眼も耳も鼻も舌も意もなく、色も声も香も味も触も法もなく、限界もなく、意識界もない。

舎利子よ、実在の世界（真の空）とは、生ずることにも消滅することもない。垢も、浄まることもない。また増やすことも、減ることもない。

故に実在の世界（真の空）には、人の持つ感覚器官の対象となる物

質や現象と、その感覚器官を通して入ってきて形成される意識もないのである。

また、無明という迷いもなく、また無明という執着がつきることもなく、さらに老死という因縁もなく、また老死という輪廻が尽きることもない。苦もなく、苦の因もなく、苦が滅することもなく、その道もない。

自分には、本来すべてが欠けることなく備わっているということがわかっているので、他に求める智もなく、他から得ようとすることもない。

修行の菩薩は、すべてのすべての引っかかりや把われを無、無、無と切って切って切り抜いて成し遂げた最高の統一である般若波羅蜜多（正覚）の行によって心に妨げも把われもなく恐れもなく、肉体世界は実在であり、すべてであるという幻想と錯覚である、一切の顛倒（てんどう）夢想を手放し、神界の境地（自由自在の境地）に達する。過去、現在、未来の三世の諸仏も般若の智慧によって阿耨多羅三藐三菩提（あのくたらさんみゃくさんぼだい：この上なく優れていて、正しく、完全な悟り」という、はかり知れない正覚の世界を現わし、宇宙にひろげる。

故に最高の統一である般若波羅蜜多（正覚）の行は真実と知るべきである。この真言は、偉大なる神秘の言葉であり、その神秘を明らかにする真実語であり、限り無い無上を示す言葉であり、比類なき輝きを放つ真言であり、一切の苦しみと災厄を除くものである。

観世音菩薩は、般若波羅蜜多の真言の働きを説いて、次のような真言を教えてくださった。　羯諦（（ぎゃてい）、羯諦（（ぎゃてい）、波羅羯諦（はらぎゃてい）、波羅僧羯諦（はらそうぎゃてい）、菩提婆詞（ぼじそわか）般若心経

（この真言について、五井先生は、「明らかにせよ、真理を明らかにせよ、さすれば、神界に昇れるのだよ。」という意味であると解説されています）。

顛倒夢想の意味

以上から、顛倒夢想について整理してみましょう。

般若心経の内容は、端的に言えば、正覚を得るには、宇宙神の分身である自分の天命を思い出せばよい。その天命は、神界の愛と調和の光をこの未開の地上界に自らの身をもって現わすことである。自分の天命を

見失ったのは、自らの光によって、光に変容しようとした対象の崩れていく姿を自分だと錯覚したからである。ゆえにその錯覚を手放せば、自分の天命を思い出し、天命を完うさせる、即ち正覚を取り戻せるのである。

この内容から云えば、顛倒夢想とは、自らの光によって、光に変容しようとした対象の崩れていく姿を自分だと錯覚した思いのあり方を言われていることに気づきます。

正覚の思いのあり方について、顛倒夢想の思いのあり方とを比べて、解説されています。

無明という迷い、老死という輪廻、苦の因もなく、それを乗り越える方法も必要ない。これを別の言葉で云えば、生きとし生けるすべてのものが、破壊と進化創造を同時にしつつ、大調和され、永遠に存在可能な状態になっている。即ちこの神界にある時間は、肉体界にある過去、現在、未来のうち、現在しか存在していない、そして肉体界にある分離感もなく、すべてが一体感で融合していると。

顛倒（てんどう）した思い方の因（もと）の背景

五井先生は、顛倒夢想という事象が、私たちに生じた背景について、五井先生は次によように解説されています。

「顛倒夢想の因となっている、誤てる想念（業生）は、人間が神様（直霊）から分かれ、霊界、幽界、肉体界へと降りてきたとき、神様（直霊）への想い（感謝）を疎んじ、五感六感に感ずるものの他は無いと思うさかさまな考え方や、真実は神仏と一体であり、本体は自由自在な神霊である人間を、肉体や幽体という限定された器的、物質的なものと夢のような思い方、顛倒（てんどう）した思い方をするようになったために生じたのである。（『新しい般若心経の解釈』１４ページ）

「この誤てる想念（業生）は、あまりにたまりすぎると、自己の生命の磁場（肉体、幽体）が汚れるのである。それを洗い浄めようとして、生命の本源から強い力が出てきて、その強い力に押されて、汚れが外部にだされてゆく。この汚れが取れてゆくに従って、生命が輝いてゆくわけであるが、この汚れの取れてゆく姿が、病気や不幸や貧乏となるのである。

この病気や不幸や貧乏を「消えてゆく姿」と五井先生は説かれてい

る。」（『白光誌』１９６３年７月号９ページ）」

正覚につながる空の道

この意訳のなかで、五井先生が最も注目された言葉は、空と色であります。

まず、空について次のように説かれています。

「　真の空とは、すべての現われに絶対に把われない境地になることをいう。普通肉体人間があると思うすべてを無しと捨てきらしている。統一の最高境地には、肉体観念はもちろん幽体観念、霊体観念を解脱しえた宇宙即自我、自我即真理という境地がある。この境地は何にも無いということではなく、空空漠々という境地ではない。自己の中に一切があり、一切の中に自己がある。即ち実在そのものという境地なのである。

その境地を釈尊は空即是色といっている。色即是空で空になって、空になった瞬間に現象世界の仮相的色（もの）の世界が、すべて光明燦然たる実在、宇宙に満ちる存在の種種なる使命的光（色）として存在してくる。つまり色即是空という色と空即是色という色とは往相と還相の違いであり、仮相の色（もの）と実相の色（光）との相違なのである。五感六感（肉体幽界）で見えるすべての色（もの）を空と切ったとき、この色（もの）は実在と業因縁との混合物として、現われていたので、一度、一切を空と断ち切る。すなわちこの現象のすべてからの把われを捨て切る、現象という幕を切り捨てると、その瞬間改めてこの世がそのまま実在の現れ光明燦然たる姿として現れてくるのである。（『般若心経の新しい解釈』１２ページ）」

空の境地になった時の観方

これは、空の境地になる前と後では、同じ肉体界のものや出来事そして、肉体に対する観方がぜんぜん違ってくると言われているのです。

それについて、次のように述べられているのです。

「　空になってしまうと、今度は空の状態から生まれてくるもの、ものというのは、机というのもあるし、肉体もある。そして、もの、あるいは出来事というものがはっきりわかってくるのである。（略）

宗教も信仰も何もなくて、ごく当たり前に生きている人、悟りも何もしない人の観ているもの、机でも、お米でも、人間でも、肉体で

も、すべてのものというものと、空になってしまってから観るものというのは、同じものでも内容が全然違うのである。(『空即是色　般若心経の世界』１４ページ)」

さらに具体的に説明されています。

「　肉体がある。これは物質である。肉体は動物か神の子か。肉体的にみれば動物である。虎だって、犬だって猿だって、同じ組織になっている。肺もあり、腸もあり、胃もある。そうすると、これは、単なるもの、物質か、肉体か?ふつうの宗教のない人の目からみれば、これは単なる肉体である。ところが、本当にわかった人（空になった人）から見れば、肉体ではないのである。光の波と自我欲望のカルマというまざったものが、肉体に現れている。だんだん浄まり、悟りに近づけば近づくほど、その肉体の波は光一元になってくる。しかしふつうの人は光の波と業想念のまざって肉体になっている。(『空即是色　般若心経の世界』１６ページ)」

空と断じるとは、どういうことなのかについて、五井先生は、「空と無と零の違いはなんなのですか」の質問に対する回答の中で次のように解説されています。

「　一つだと言えば、一つである。一つではあるけれども、使い方が違うのである。空というと空だけで、他になにもないのである。無というと、無に対する有があるわけである。有を消すための無ですから相対的になっている。空ということは、絶対なのである。対照とするものがない。零というのは無より空に似ている。けれど零になったら一が生まれるのではないのある。空になったら生まれてくるものがあるが、零はいつまでたっても零なんである。言葉をかえれば、零はすべてを消してしまう。だから厳密にいえば、空と無と零はちがうのである。

空は絶対であり、空の中からあらゆるものが生まれてくる。無というのは無と有があるから相対的になってしまう。だから一番深いのは空なのある。空にしても空の奥の、また奥のまた奥のまたその奥の空とあって、その深い空になったら、実相が生まれてくる。本当の姿がそこから出てくる。

空というのは実にすごい言葉である。私が修行中にいろんなことをしたが、私が悟ってしまうとカルマが働けない，魔が働けないというので、業想念が邪魔するわけである。それでいろんなものが来

て私を邪魔しようとした。その時私は何をいったかというと、腹の中で「空――！」って空の気合をかけた。空っぽの空だから何もない。障るものがなにもないから、ピュッと取れてしまう。（略）

しかし、本当の空になるのは大変なんで、そこで消えてゆく姿を私が使っているわけである。（『空即是色　般若心経の世界』１９０ページ）」

消えてゆく姿の中に本心の光を見出す

次に消えてゆく姿に直面したとき、どのように対処したらよいかについて、釈尊の示されたやり方をより行じやすいように、五井先生は、次のように言われているのです。

「　真実の空になり切るまでに幽界と霊界とか通りぬけることになるので、途中の幽界あたりで引っかかって、外道的なま悟りになったり、あやまてる霊能になったりすることが多い。そこで釈尊はすべてのすべての引っかかりや把われを無、無、無と切って切って切りぬいて最高の統一、般若波羅蜜多（正覚）の行を成し遂げられたのである。（『般若心経の新しい解釈』１４ページ）」

五井先生は、釈尊がすべてを空と切られたのに対し、すべて引っかかりや把われをなくすためには、誤てる想念（業生）と真実の人間の姿（本心）を区別され、すべてをそのまま消えてゆく姿として、世界平和の祈りで神様のみ心の中に入れてしまい、その中で自然に選り分けてもらって、汚いものは消してもらい、いい光だけでてくるようにすればよいとされたのです。つまり生命の実体だけがそこに残って、いわゆる空即是色になるというわけです。

不幸や貧乏や病気が起こるのは、現在の想念によるものではなく、過去の想念によるものと、みさだめ、決して、あわてないことである。そのような状況に惑わされないように、影響をうけないように、現在新しい未来を創っていくのであるという信念のもとに、神への感謝をしながら、明るく楽しく取り組んでいくことが大切と言われているのです。

「　子供が悪いのも、お金が出来て生活が楽なのも、過去世の善行為、想念が結果として今現れているのである。

いい結果も悪い結果も、今は結果なのである。過去世から今日に至るまでの想念行為の結果がそこに現われている。

だから我々はどうしたらいいかというと、これから先の運命をつくるのである。過去のことはもう済んでしまっているし、今のものも済んでいるのである。今、みなさんはこの道場に座っていらっしゃるけれど、過去世において済んでいるわけある。

だからこれから先の人生、また来世、あるいは霊界での姿をつくる為に、これから努力するのである。（『白光誌』１９７７年６月号１７ページ）」

そして、消えてゆく姿として、出てくるものに対して、次のような注意をしてくださっています。

「　消えてゆく姿として出てくるものは、あくまで人間自体の本体、本心を現わすがためにじゃまになる業生を取り去ってしまう状態なのである。

その真理を知らないと、そこに現れた不幸災難や、環境の悪さをしっかりつかんでしまい、せっかく消したものを又つかんで放さぬことになり、二重の因縁として業生の層を厚くしてしまうのである（『白光誌』１９６７年４月号１０ページ）」

「　すべての苦悩は現われたとき、即ち消え去ってゆくのであって、その苦悩をとらえようとして、心の手をその方に伸ばさない限りは、その業因縁は再びその人に戻ってくることは無いのである。（白光誌１９５８年７月号３１ページ）」

即ち、消えてゆく姿を前にしては、消えてゆく姿に感謝するのではなく、消していただいていることに感謝すべきといわれているのです。何故なら、業生を消していただくことにより、本心（神性）が現われてきているからです。

守護霊守護神と大神様の働き

誤てる想念（業生）が消えてゆくことに、実は守護霊守護神と大神様が大きくかかわっているのです。

このことは、般若心経には、言及されていませんが、五井先生が初めて説かれた真理であります。

次の言葉のように、守護霊守護神は、私達が生まれる前からズーッと見守り守護していてくださっているのだというのです。

「　各人を守っている守護の神霊が、さまざまな環境に各人を置いて、その人が永遠の生命を一日も早く、自己のものにできるような経験を

与えるのである。そういう経験を過去世から種々と与えられながら、人間は成長して行くのである。（白光誌１９６７年1月号5ページ）」

五井先生は、守護霊守護神のそれぞれの役割を区別し、守護霊守護神の役割を大神様の中に入ってゆくエレベーターとして説明されています。

「　神のみ心の中に入ってゆくにしても、梯子あるいはエレベーターがないと入れない。今までの宗教というのは、祈りは教えるけども、大神様の中に入ってゆくエレベーターがない。そこで私は天と地をつなぐもの、光のエレベーターを発表したのである。天と地をつなぐものは何かというと、地の方に深く強くつなぐものは守護霊だし、天の方に深くつなぐものは守護神なのである（『白光誌』１９６１年7月号５０ページ）」

どのようにして、消してくださっているか、イメージ的に解説してくださっています。

「　消えてゆく姿の先は、神様のみ心の中である。だから神様にすべてをお任せしてしまうことは、消えてゆく姿とおなじである。ただ消えてゆく姿といっても、神様がないと消えてゆかない。守護霊守護神があり、大神様がないと消えてゆかない。

なぜ消えてゆかないかというと、三界をグルグル横に回っていて、あいつは憎らしい奴だ、ああいけないのだと思っても、ただそれだけではその想いは消えない。

それをどうするかというと、守護霊さん守護神さんありがとうございますとやると、今まで横に回っていたものが、縦にスーッと上に、神様の中へ入ってそこで消される。そうすると、その回っているものがだんだん少なくなる。消えてゆくに従って、本心の光がどんどん開いてゆく。（『白光誌』１９７１年2月号１７ページ）」

般若心経において、神界に昇るための知恵と方法が示され、多くの優れた名僧がそれを実践され、正覚への道が、いろいろな視点から開かれ、今日五井先生によって誰にでも実践でき、正覚への道を歩むことができるようになったと言えます。

その重みを、私たちは感じ、心して消えてゆく姿で世界平和の祈りのみ教えを実践して、自分の身を通して、私たちの天命である、神聖を輝かせ、愛と調和の世界の完成に尽力していきたいものです。